
円環の粉碎

——デリダとの距離——

十川幸司

1

デリダの『生死』は、大きな射程を持った魅力的な講義録である。私はこの本を、コロナ禍が始まる前年に、パリに数日旅行したさい書店で偶然見つけ、すぐさま買ってホテルで読み始めたことを覚えている。今回、この講義録の邦訳を機に合評会を開くので、コメンテーターとして参加して欲しいかという依頼があった。私はこの数年、フロイトを生命や動きの観点から読んでいたこともあり、この企画は魅力的でもあった。とはいえ、本講義録の主題は、フランソワ・ジャコブ、カンギレム、ニーチェ、ハイデガーなど数多くの生物学者、哲学者への参照があり、それらに言及することは私の力に余る。また私は、この20年近くはほとんどデリダを読んでいないので、デリダの講義録を巡ってどのような議論が展開されているのか表面的にしか知らない。それゆえ、あくまでフロイトに関する箇所についてのコメントならば、という条件でコメンテーターを引き受けた。

そして、改めてこの講義録を読んだ私の印象は、デリダのテキストに対するかつて感じたことのない違和感であった。この感じはきわめてパーソナルなものである。本稿は合評会のさいに話そうと思って用意した短いメモの内容を、文章化したものである。『生死』の合評会コメントとしては不適切かもしれないが、本稿で私はあくまで一人の分析家として、本講義録を読んださいに感じたデリダに対する「距離」を述べることにした。その点をあらかじめお断りしておきたい。

2

個人的な話から始めることにする。精神科医になって5年頃に、私は大学病院で勤務をしながら、ラカンのテキストを集中して読んでいた。1年ほどテキストに向き合っているうちに、思想家もしくは精神病理学者としてのラカンの理論は理解できるようになった。だが、そこに精神分析家としてのラカンを読み取ることはできなかった。「精神分析的な」治療経験なら若干あったが、その程度の経験ではラカンが精神分析と呼ぶ実践にはとても届かない。私は精神分析家としてのラカンを理解したいと本気で考えるようになった。その熱はいっそう高まり、私は大学病院をやめて、エーヌ県のカトリック教会を改装した精神病院で働くことにした。その病院には、フランスで唯一ジャック・ラカンの名が付けられた病棟があった。1991年の夏のことである。

当時 ECF (École de la cause freudienne) の実力のある分析家、精神科医が、その病院で勤務しており、症例提示のさいには、ラカンの観点からコメントが行われていた。しかし、それらの見

解は、ラカン理論に準拠するなら一応の妥当性を持つが、その目の前にいる患者が体験していることの間には大きな乖離があると思えなかった。どの分析理論も、分析家の経験とそこから引き出された「仮定」に依拠して論を構築している。したがって、その帰結は必ずしも個別の患者の病理あるいは「実存」に沿ったものではない。特にラカンのように抽象度が高い理論の場合、現実との乖離の傾向は顕著なものとなる。デリダは『真理の配達人』というテキストを「精神分析は、自らを仮定することで、自らを見出す」という有名な一文から始めたが、私は ECF の分析家らの解釈は、デリダが批判しているような「仮定」に基づいた円環の中でのみ成立している教義体系に見えた。

精神分析経験の具体性を掴み取るには、自分が傍観者に留まるのではなく、その経験のなかに身を投げ入れなくてはならない。それが、私が2年ほど回り道をして辿り着いた結論である。翌年から、私は約6年間、ECF とは対立する AFI (Association freudienne internationale) を設立した分析家との分析を行うことになる。誰に分析を受けるかという選択は、決める際に結構悩むものだ。だが、数年間、パリの分析家の講義や症例提示に参加するなかで、私は一人の分析家に魅了されていた。彼の講義の内容が私にとって説得的だったというわけではない。それより患者を前にしたさいの彼の寛容な態度、毅然とした立ち振る舞い、声や姿、つまりは生きているその姿に魅了されたのである。ある日、決心して、彼に直接電話をすると、明日来ると快活な声が響いてきた。分析は、週4回、ときには週5回行われた。その詳細は、本稿とは別の話なので、ここでは述べない。

フランスに長期、滞在するには、当然、滞在許可書が必要になってくる。その場合、手っ取り早いのは、大学に入ることだ。私はまずはラカン派の拠点であるパリ第8大学精神分析学科に入学した。いくらフランスの滞在許可書のためとはいえ、大学に居続けるには、何もしないわけにはいけない。私は今回の合評会の『生死』講義をもとにして書かれた La Carte postale (Flammarion, 1980) を題材に「デリダとラカン」というテーマで、150枚程度の DEA 課程の論文を書いた。『絵葉書 I, II』は、現在、水声社から信頼できる翻訳が出ているが、当時はどう読めばいいのかも見当がつかない代物であった。だが、すでに分析作業を始めていた私には、セッションで起きていることよりも、デリダの架空の手紙と緻密なテキスト読解から構成されたこの書物が、精神分析の本質を示しているように思えた。論文は一応受理されたものの、ラカン批判の論文はパリ第八大学では冷遇される傾向があった。

その翌年、私は EHESS の博士課程に所属を変えた。当時の EHESS には、フロイト批判の先鋒であるジャック・ブーヴレスやヴァンサン・デコンブが活躍していて、私にはその自由な雰囲気心地よかつたのである。そしてそこでは、デリダが華々しく、エネルギーに講義を行っていた。私は6年間の分析期間中、毎週デリダの講義に出ていた。デリダは私の分析家のことを、『絵葉書』の中で(原著 p543)、ラカン派の「郵便配達人 (mailman)」との中で皮肉っている (mailman とはその分析家の名前の振りである)。その箇所に私が気がついたのは分析を始めて、かなりの時間が経ってからである。

3

『生死』講義でも明らかなように、デリダの思考は精神分析との強い緊張関係から繰り広げられている。とりわけ、70年代、80年代のデリダの著作には精神分析の影響が顕著である。彼自身、「精神分析の助けなしに、脱構築が今のような形を取ることはなかった」と明言している。とはいえ、デリダが取り扱うフロイトのテキストは、1920年前後のいくつかの論考[「喪とメランコリー」(1917)「不気味なもの」(1919)『快原理の彼岸』(1920)「マジックメモについてのノート」(1925)]に限定されている。

『生死』講義で取り上げられるのも、デリダが「最もフロイト的な思考」を示していると考えられる『快原理の彼岸』である。第11回から第14回までの講義では、『彼岸』の逐語的でアクロバティックな読解が行われている。後に著作化された『絵葉書』では、デリダは『彼岸』を、フロイトの自伝的な要素(娘の死など、家族の問題)が織り込まれた「小説的な」論考として読んでいる。さらに『彼岸』について書かれた、デリダのテキストは、『彼岸』の詳細なテキスト読解でありつつ、当時デリダ家で起きた厄介事(妻と別の女性との関係、これもまた家族の問題だ!)を、半自伝的な形で組み入れた哲学的小説と読むこともできる。

『絵葉書』における、デリダの『彼岸』の読解は、反復強迫を前にして逡巡するフロイトの単独的な「破行」の驚異的に詳細な分析であると同時に、その「破行」のリズムの反復である。さらに、この『講義』をもとにした『絵葉書』においては、デリダはフロイトの反復不可能な「破行」を、フロイトの歩みをなぞりながら別のリズムで反復している。図式的な整理を一切拒否しているように見えるこの著作の内容を、乱暴なことを承知の上で、このように要約しておこう。

私は当時は、デリダの複雑に入り組んだ、緊張に満ちたテキストに魅了されていた。そしてフロイトの『彼岸』でなされる思弁と解釈が、精神分析経験の核心だと思い込んでいた。しかし『彼岸』の思考方法は、好意的に見ても、たかだか「一つの」精神分析に過ぎず、それが精神分析の「すべて」というわけではない。このような誤解は、理論的テキストから精神分析経験を考える場合に陥りがちな罠である。実際の精神分析のセッションは、混乱と重苦しさが続く、単調で退屈な繰り返しである。私は沈黙がちな分析家に対して、「あなたはやはり郵便配達人(mailman)なのだ」と、呟いたことがある。言うまでもなく、これは私の陰性転移である。そのさい、分析家は、私の不満を、私の生活史の文脈に組み入れて解釈をした(私の父は、離婚してから、私に会いにくることなく、しばしば遠方から短い絵葉書を送ってきた。つまり、私の父こそが mailman だったのだ!)

分析が進むにつれて、私は精神分析理論よりも、精神分析経験の中で生じる、感情や感覚の変化、さらには自分の身体の変化に敏感になっていった。精神分析とは、「精神」を変化させることだと、私たちは誤解している。精神分析が変えるのは厳密に言えば「精神」ではないだろう。それよりも「精神」を包み込む「身体」を変化させるのである。精神分析は、自分が生き延びるために用いている巧妙な防衛体制を崩す。それによって、私たちの精神は一旦カオスに陥る。そしてそこから帰還するさいに、私たちは別の「身体」を獲得している(この「身体」とは後で述べる「枠組み構造」とほぼ同義である)。分析作業において、私たちは分析家とともに、新たな「身

体」を作り直すのである。精神分析経験の核心には、このような「身体」の経験がある。

あるテキストが人の生を変えることはよくある。テキストにはそれだけの力がある。しかしテキストはテキストに過ぎない。フロイトが書いた全ての著作、ラカンの著作、デリダの著作、これらはすべてテキストなのであり、そこから精神分析経験そのものには入り込むことはできない。そのような当たり前のことを、私は何年もかけて肌身をもって知ったのだ。

デリダの精神分析に対する根本的な関心は、哲学と精神分析の境界が持つ豊穡な可能性へと向けられている。国際哲学コレージュの設立のさいにも、デリダは「哲学/精神分析」という講座を作り、両者の境界から生じる諸問題を哲学的な問いへと洗練させた。私もこの境界から生じる問いに長らく囚われていた。しかし、自らの分析治療の終盤で、私はこの境界に留まるのではなく、境界の外部へと出ようと思った。その方向へと舵を切ったのも、また分析経験の力である。私は、唯一、日本語で書いた最初で最後の論文を、デリダが「抵抗」と題した論文で引用した『ファウスト』のメフィストフェレスの言葉で論を締め括った¹。

「思考の工場は実際機織り仕事のようなもので、一足踏めば幾千もの糸が動き、杼は絶えず上下し、糸は目にも止まらぬ速さで流れ、一打ちすれば幾千もの結び目ができる。そこへ哲学者が入ってきてあなたに論証してくれる。これはかくかくしかじかのものであると。第一段はこう、第二段はこう、だから第三段と第四段はこうなると、もし第一と第二が存在しなければ、そもそも第三と第四は存在しないだろうと。どこの学生もこの手の話をありがたがる。だが、彼らのうちで機織りになった者は一人もいない」。

つまり、私は機織りになろうと決めたのである。

だが、ひとまず自分の分析を終えたからといって、分析家になれるわけではない。ラカンの精神分析は、理論面においても実践面においても多くの欠陥をかかえている。そこから私の真の苦闘が始まったと言える。私は帰国後、短期間、別の分析家の分析を受け、それに平行して長年にわたり、スーパーヴィジョンを受けた。とりわけクライン派の分析家とのスーパーヴィジョンは、私にとっては決定的なものだった。このように精神分析経験を積み上げるなかで、私は私なりの理論的、実践的な土台を持つことができるようになったと思う。ラカンは、分析家になるものは誰もが自分で精神分析を作り上げなくてはならないと強調したが、90年代後半から私が試みたのは、私なりの精神分析の *réinvention*（再発明）である。このような破壊と創造の試みは、私のようにラカン派からラカン派の外部に出る場合はもちろんのこと、ラカン派の分析を受けて、ラカン派の分析家になるさいも通過しなくてはならない過程である。理論は一旦解体され、新たに作り直されることによって、はじめて「一つの」独立した固有の分析理論に生まれ変わる。

4

さて再び、『生死』講義に戻ろう。私は冒頭で、『生死』講義を読んださいの「違和感」に触れ

¹ 拙論「『抵抗』の思考——デリダと精神分析」(『精神分析への抵抗』(青土社、2000年)に収録)。

た。私は分析家として働き始めて、すでに1万数千時間以上のセッションをおこなっている。この経験が、分析家としての私をすっかり変えてしまっている。『生死』講義を読んださいの「違和感」とは、「もはやここには私の問いはない」という実感でもある。かつて、分析を受けながらテキスト読解に明け暮れていた頃は、『生死』講義で繰り広げられている問いが、まさに私の問いであった。だが、長年分析家として仕事を続けているうちに、かつてあった問いは、なくなっている。問いが解けたのではない。私の変化とともに、問いが変わったのだ。私の問いは、今は別のところにある。それは例えば、ドナルド・ウィニコットのテキストの中に、あるいはアンドレ・グリーンのテキストの中であって、デリダの『講義』の中ではない。

とはいえ、この『講義』の中には、私の現在の問いと結びついた論点が二つある。それを最後に簡潔に述べておこう。

一つは、『彼岸』で論じられている拘束のメカニズムから引き出された *stricture* という概念である。これは *structure* (構造) と掛け合わせた概念で、『絵葉書』では締付構造と訳されている(『講義』では「緊縛構造」、『絵画における真実』では、絵画の「枠」と関連づけたうえで「縛り」と訳されている)。*Stricture* は、拘束し、締め付ける作用(構造)のことである。

拘束 (*Bindung*) とは、一次過程を二次過程へと移行させるものであり、現実原理を通じて、快原理の支配を可能にする。この拘束という作用を、フロイトは初期から用いているが、『彼岸』においては拘束作用の考察を前面に展開し、生と死を論じている。そこでの拘束のメカニズムは初期に比べはるかに複雑なものになっている。

まずフロイトは傾向と機能を峻別し、機能を一次的なもののみならず。快原理は快に向かう傾向だが、拘束は傾向ではなく、機能である。そして拘束という機能は、快原理という傾向に奉仕するという関係にある²。拘束は、快原理から独立した、より高次のメカニズムだということが重要な点である。「拘束は、心的装置の最も根源的で決定的な機能であり、それは快原理の支配を導入し、確実にする準備的行為である」³。拘束は快原理から独立しているゆえに、拘束は快原理に奉仕すると言っても、必ずしも拘束が快をもたらすわけではない。拘束が強すぎると、緊張が高まり、不快となる。しかし、拘束がないと心的装置は破壊してしまう(例えば、外傷刺激を拘束する機能がなければ、主体は破綻してしまうだろう)。したがって、拘束という機能は、ダブルバインド的に、つまり締めすぎず緩めすぎずという二重性を維持しなくてはならない。

この締付構造をフロイトのテキスト解説からではなく、臨床経験から構築したのは、アンドレ・グリーンである⁴。彼は、人間がカオスから逃れ、この世界に住むためには「枠組み構造」(*structure encadrante*) という機能が不可欠であることをウィニコット、ビオンに依拠しつつ、理論化している。

そして、もう一つはデリダが、『生死』講義の第14回で、急ぎ足で展開しているリズム論である。デリダは、リズムを備給の時間的变化の中で出現する形(リュトモス)と関連づけて論じて

² 『生死』講義、332頁。

³ 『快原理の彼岸』、122頁(『フロイト全集』17、岩波書店)。

⁴ André Green, *La folie privée*, Gallimard, 1990.

いる。しかし、このリズム論は十分に深められることなく、「リュトモスの概念は哲学による思考を免れるものだ」と述べられた後、唐突に議論が打ち切れ、ニーチェのリズム論を断片的に論じて、この講義を終えている。

ここでデリダは、フロイトが『彼岸』においては、欲動が時間の中で変動するリズムを持つものとみなしていることを発見している。欲動がリズムを持つことは、フロイトの「正当な」読解からは出てこない。フロイトは、欲動の特徴を「恒常的な力」だと考えている⁵。またラカンも「欲動は恒常的な力であり、減衰はしない」と強調している⁶。しかし、デリダは『彼岸』の緻密な読解から、フロイトが欲動にリズムを想定せざるを得なくなっていることを看破している。

この拘束とリズムという二つの主題から、私たちは精神分析を新たに構想できる⁷。乳児が初源に経験する欲動のカオスは、欲動に内在するリズムによって、リュトマス（形）を持ったものとして枠付けされる。それがグリーンという枠組み構造である。枠組み構造は、*intrapsychique*（精神的）な側面から見た主体の誕生である。しかし、欲動が過剰な場合や、リズムがバランスを欠いているときは、枠組み構造は、バランスを欠いたものとしてしか構築されないだろう。分析治療が目指すのは、主体の脆弱な枠組み構造を、分析家との *interpsychique*（間主体的）な関係から生じたリズムを内在化することによって、より柔軟で強固なものへと再構築することにある。

この二つのテーマは、ラカン、ビオン、ウィニコット亡き後の、今後の精神分析理論の賭金ともなる課題である。この課題は、デリダのテキストをテキストとして読んでいただけでは生まれてこない。そして当然のことながら、この課題を解決できるのは、テキスト上ではなく、分析実践においてでしかない。それを理論的テキストとして組み立てるのは、その後の作業だ。このようにデリダを「転用」することは、デリダ読みからすれば牽強付会的な歪曲に見えるかもしれない。しかし、このようなアプローチこそが、今の私には最も魅力的で生産的に思えるのである。

⁵ S・フロイト『メタサイコロジー論』、講談社学術文庫、2018年、11頁。

⁶ J・ラカン『精神分析の四基本概念』、岩波書店、2000年、218頁。

⁷ 私はこのテーマを「リズムの精神分析」と名づけた連載で展開している（『思想』2021年第8号、2022年第9号、2023年10月）。